

氏名(本籍)	^{すが} 菅	^{ゆたか} 豊(長崎県)
学位の種類	博士(文学)	
学位記番号	博乙第1,365号	
学位授与年月日	平成10年3月23日	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当	
審査研究科	歴史・人類学研究科	
学位論文題目	日本におけるサケ民俗の形成—民間宗教者の関与を中心として—	
主査	筑波大学教授	博士(文学) 高桑 守
副査	筑波大学教授	文学博士 平山和彦
副査	筑波大学教授	文学博士 牛島 巖
副査	筑波大学助教授	文学博士 小口千明
副査	武蔵大学教授	宮本 袈裟雄

論文の内容の要旨

本論文は、サケ民俗の形成と伝播における民間宗教者—とくに修験—の役割について実証的に検討し、さらに民間宗教者のもつ特殊な技能について明らかにするものであり、序論、本論(1～5章)、結論から構成される。

序論では、従来の漁撈儀礼研究の視点および修験道史研究を整理する。つづいて、サケ民俗の研究史、およびサケ民俗の全国的な状況について整理し、概括する。

本論では、サケ儀礼の展開されている五つの調査対象地域における、漁撈形態、歴史の変遷、サケ儀礼、口承文芸などへの民間宗教者関与の質、度合いを地域内部から探る。

第1章「ハツナギリ儀礼と修験者」では、新潟県岩船郡山北町大川流域で展開されるハツナギリ儀礼を中心に、考察を行う。その漁撈儀礼が漁撈形態に強く影響を受ける状況を、社会的な様相の中からも導き出す。注目できるのは、ある特定の集落で、漁撈儀礼から宗教的な儀礼へとその意味の比重が移った特別な祭祀が展開されていたことである。これが成立し維持される要因を探ると、その集落に存在するホウインと呼ばれる修験の宗教者像が浮かび上がっている。この民間宗教者は、他の宗教者に比してより漁撈活動に密接に関与し、それをあたかも支配するが如き立場にあったと推測される。修験者と言う特殊な宗教者が漁撈儀礼を統合化、体系化している点を指摘し、かつて修験者が宗教的な力によって「川の民」を支配していた可能性を示す。

第2章「又兵衛祭り」と修験者」では、岩手県宮古市津軽石で伝承される又兵衛祭りと伝説を分析し、その歴史的な編成過程と、それに大きく関与した民間宗教者について明らかにする。この地域ではシントウサマと言う修験道の祭式を担う人々が、近世からサケ儀礼を担ってきたと考えられる。呪術と漁撈儀礼が収斂して現在のような漁撈儀礼として洗練化される過程で、この修験の人々が大きく関わってきた。近世には、民間宗教者がサケ儀礼を司るものとして、既に特定の地位を占めており、サケ漁をめぐる信仰、観念的な世界を統括していた可能性を指摘する。

第3章「サケの明神祭と神官」では、新潟県南魚沼郡小出町四日町で行われるサケの明神祭を題材として、魚野川、信濃川流域の神社祭祀とサケ儀礼が密接に関連をもっている点を指摘し、それを結びつけたものとして修験系統の宗教者の存在を考える。現在、魚野川、信濃川沿いのサケ儀礼を担う宗教者は、諏訪神社や金峯神社の神官であるが、サケの漁撈活動を修験系統の技法を用いて儀礼的に総括しており、様々な事象を融合する力をもつ

ている。また、そのような修験系統の信仰と接触する中で、神社祭祀がサケ儀礼を構成していったと考えられ、その意味でこの地域で行われるサケ儀礼は、純粋な神社祭祀ではなく、様々な民間信仰の混融した結果、様式化された儀礼であると指摘する。

第4章「大日祭と〈大日如来を持たる百姓〉」では、山形県最上郡真室川町大沢小国の大日祭を中心として、最上川中流域においても漁撈者の行うサケ儀礼と、サケを用いる民間宗教者の儀礼が類縁関係にあることを述べ、それが民間宗教者による儀礼要素の吸収の結果であることを明らかにする。この地域では、儀礼へのサケの利用が特定の宗教、宗派に限定されず、サケ儀礼が神社祭祀、寺院祭祀、巫女祭祀など多様な場面に登場している。このことから、サケを神饌にしたり、それに伝説を付与したりする技能、技術が特定の宗教教義に起因しないことを指摘する。

第5章「初卯祭と天台開基の真言の寺」では、千葉県香取郡山田町山倉というサケとの関わりが東北日本に比べ相対的に低い地域において、高度に儀式化された祭りである初卯祭にサケ儀礼の要素がみられる点にまず注目し、それが広域に行動する修験系統の宗教者によってもたらされた可能性を指摘する。関東におけるサケ漁には儀礼、信仰的な伝承が乏しく、実際にサケを捕る漁撈者のもつサケ儀礼は貧弱であるといわざるをえず、そのため、この地域で行われるサケを用いる宗教儀礼が、民間の漁撈儀礼から儀礼的要素を借用し吸収した可能性はほとんどない。その点から鑑みるに、かなり広い地域をネットワーク化する宗教者の存在が重要になってくるのであり、サケ儀礼を伝え、異なった地域を繋げる大きな力―移動する宗教者―を想定する必要があることを指摘する。

結論では、五つの地域の比較を通して共通の要素、担い手像、それを共通せしめた要因という側面から、サケの民俗の展開を明らかにする。

サケにまつわる石の民俗、東北地方に広く分布するサケと弘法伝説、サケの黒焼き儀礼、独特の話型をもっているサケのオースケ譚についての分析を通して、地域的な差異が認められるもののそれらの民俗の形成と伝播に深く関わっていた宗教者は修験道的性格を強くもっていることを論証している。

以上のような、サケと修験をめぐる宗教的世界は、決して特殊な世界ではなく、日本の民間信仰が有するある側面、ある断面を確実に表現しているといえる。本研究で取りあげた課題、すなわち民俗への宗教者の介在という事実は、サケの民俗に限らず、日本の民俗事象に敷衍できうる課題を示していることを指摘し、全体の総括としている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまで殆ど検証されることのなかったサケ民俗の形成に視点をあて、各地域に展開するこれら民俗の具体相を明らかにすると共に、サケをめぐる漁撈儀礼の形成過程に民間宗教者の存在が大きく関わっていることをその在地的活動を通して論証しようとした意欲的な作品である。

サケ民俗の研究については、漁法や儀礼あるいは口承文芸などの領域において、資料の収集がなされていたものの、従来これらを全体的に把握する試みは皆無に等しかっただけに、民間宗教者の在地的活動とその関与を考察することにより、日本におけるサケ民俗を統合的に把握する視点が揭示し得たことは、この分野の研究に大きな刺激を与えるものといえる。このことは修験道研究で注目されている、里修験と民俗の関わりに関する問題にも切りこんだ新しい知見を提示するものともなっている。とくに、その検証過程で示される著者の手法は、従来の研究に関わる丹念な研究史的批判を踏まえた上で、自らの緻密な実地調査により、現地において得られた史資料を駆使して論を組み立てようとする試みが随所にみられ、その主張するところも明解であり、実証的で手堅いものとして高く評価することができる。

しかし本論文における論証性は十分に認められるものの、(1)サケ漁が山で暮らす人々の生業複合の中でどのような位相を示すものなのかいまだ十分でないこと (2)民間宗教者との関わり論の論拠の一つである「黒焼き」習俗

について、宗教者像との関連を視る眼に弱さがあることなどの課題もある。

本論文はこうした課題を残しているものの、従来のサケ民俗に関する研究に対して新たな視点と知見を実証に基づく考察によって提示した意欲的労作であり、学界に大きく寄与しうる成果として評価できる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。